要　旨

生涯学習社会において、博物館は社会教育機関として地域の学びの拠点となることや、学校教育を補完することなど、博物館には幼児教育と子ども教育の使命が与えられ、様々な役割が期待されている。しかし、既に文献と報告で見たように、博物館での幼児を対象とする教育活動は少なく、主に「子ども教育活動」に含まれている。

以上の背景を踏まえて、本稿の目的は、博物館における幼児教育活動の形態を把握したうえで、幼児教育活動と子ども教育活動を分離し、幼児教育の効果が与える効果を考察し、博物館で幼児教育活動を独立させる必要性を明らかにし、博物館が幼児教育活動を企画する際の新しい考え方を提案することである。

第1章では、社会教育の発展背景について述べた。社会教育は生涯教育の発展、少子高齢化の影響、法律・政策の要求という3点が重要であり、そして、博物館が社会教育の機関として幼児教育と子ども教育を行っている現状を述べ、双方の違いを定義し、その上で研究目的と研究方法を提示した。

第2章では、幼児教育や子ども教育の諸課題を考察し、人生の初期教育としての幼児教育や子ども教育の重要性と社会的意義を述べた。その上で、幼児教育と子ども教育の区別を明確にし、双方の差異を明らかにした。そして、双方の差異を踏まえて、幼児教育と子ども教育を分離する必要性に言及した。

第3章では、第2章の視点に基づいて、まず博物館発展の歴史の中で幼児教育と子ども教育の変遷を述べた。そして、博物館の実施状況を把握するために、ウェブサイト内で子ども教育活動を実施している約300館の資料を収集・分析した。実施調査のデータを基づいて、博物館が幼児教育と子ども教育で差別化を図っている理由を明らかにし、博物館が行う教育の問題点を指摘した。

第4章では、滋賀県立琵琶湖博物館、福岡市科学館、長崎歴史文化博物館の3館で現地調査と聞き取り調査の結果を整理した。3館が実施している幼児教育と企画の考えを詳細に述べ、3館それぞれの幼児教育活動の特徴を明らかにした。

第5章では、これまでの先行研究と現場調査の結果を踏まえて、現時点での課題と展望を提示した。これまでの問題点をまとめ、博物館における幼児教育の新規提案を及び、今後の課題を述べた。